

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 114 Jul.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 114 Jul. 2023

特集

柄杓流川





4 月下旬、しゃくなげがわ柄杓流川を歩いているとフジの花が風に揺られていました。甘い匂いが鼻をくすぐります（2023 年 4 月 29 日）

FIELD·NOTE

no.114 Jul.

特集

柄杓流川

- 08 柄杓流川を歩く
- 12 釣竿に聞く
- 16 夜の森を見る
- 20 フィールド暦
—水辺で暮らす生きものたち—

-
- 24 あたたかさにふれる
 - 28 「今日はカフェに行ってみよう」
 - 34 ちいさい都留、見つけた
 - 45 センサーカメラが写した動物たち
 - 46 ムササビ観察日記
 - 48 都留の風景写真集—新緑の候—



FIELD・MAP

6月8日に梅雨入りした都留では、道端に咲くアジサイが雨粒をまとい、しっとりとした美しさで私たちの目を楽しませてくれました。まちなかで見つけたアジサイを紹介します。

大月市



1 楽山公園

本学の横にある楽山公園では、アジサイが散歩道に沿うように並んでいました。息の上がる上り道も、いつもより足取りが軽くなります。

(2023年6月18日)



2 さいがんじ 西願寺

国道139号線沿いにある西願寺では、用水路から身を乗り出すようにしてアジサイが咲いていました。アジサイを横目に散歩するだけで気分が上がります。

(2023年6月24日)



3 あたご 愛宕神社

禾生駅から徒歩15分ほどのところにある愛宕神社では、青や白、紫といったアジサイが広がっていました。遠くから見ると、海外の庭園のようです。

(2023年6月24日)

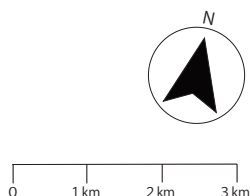
アジサイ豆知識



アジサイのなかには、色が地面の酸性度で変わるものもあります。土壌がアルカリ性だと赤に、酸性だと青になります。



私たちが花弁だと思っている部分は、じつはがくです。よく見ると、アジサイの花弁はがくの中心部についています。





山梨県都留市
面積 161,63km²
総人口 29,011 人
(2023 年 5 月現在)

特集

しゃくなげがわ

柄杓流川

都留では、暮らしのそばに川が流れています

なかでも桂川は、

富士急行線沿いや本学の近くを通っており、
私たちにとって身近な川です

地図上で桂川の上流をたどっていくと、
いくつかの支流があることがわかりました

そのなかでもひときわ気になった川が
「柄杓流川」でした

名前はなんと読むのかな

どんな生きものがすんでいるのだろう

この近くで暮らしている人は

川とどんな関わりを持っているのだろう

川の水はどこから流れてきているのかな

聞きなじみのない「柄杓流川」の名前に惹かれて
もつと知りたいという気持ちが生じてきました

柄杓流川

三ツ峠^{みづとうげ}から西桂町^{にしかつらまちょう}を通り、十日市場^{とおかいちば}で桂川と合流する一級河川。湧水^{わうすい}が流れていることが特徴である。梅花^{ばいか}藻^もは湧水で見られない水草の仲間。清流である柄杓流川ではこれを観察することができる。「しゃくしながれがわ」「ひしゃくながれがわ」「しゃくながしがわ」などと呼ばれている。現在は山梨県が「しゃくながれがわ」と読み方を統一している。

【参考】

名水を訪ねて（内山美恵子著）
山梨新報社ホームページ



十日市場付近の柄杓流川を歩いて観察しているようす (2023 年 4 月 29 日)

柄杓流川 を歩く

しゃくながれがわ
柄杓流川はどんなところだろうか。そんな疑問を胸に源流の近くまで自転車で行ってみたい、長靴を履いて川のなかを歩いてみたい。観察して心に残った3カ所を紹介する。

村井開 (地域社会学科 2 年) = 文・写真

源流を辿る

柄杓流川について地図で調べてみる。都留市付近では、北側の対岸へ渡る橋が少ないようだ。溪谷を流れているところが多く、私にとつてあまり身近な川ではなかった。柄杓流川はいったいどこから流れて来ているのだろう。そこで、地図を見て源流付近とおぼしき西桂町にある「神鈴の滝」と、富士吉田市にある「白糸の滝」をを目指すことにした。

三ツ峠駅の近くまで自転車で行ってきた。三ツ峠山の登山客と何度かすれ違う。60代くらいの女性3人組の登山客に声をかけてみると、河口湖から三ツ峠山まで登って帰ってきたという。少し進むと、西桂町の「三ツ峠グリーンセンター」が見えてきた。そこからしばらくは、川沿いに水遊び場が並ぶ「三ツ峠さくら公園」の横を進む。暑い日差しのおかげで、川で遊ぶ子どもたちは涼しそうだ。ごろごろと大きな岩が転がるのを見て、川の上流に来たと感じる。

大きな岩盤の上を透き通った水が流れる「神鈴の滝」に到着した。本当に自然につくられたものかと疑ってしまうほど、大きな岩



左：「白糸の滝」のすぐ下を流れる「下見の滝」。岩盤の表面を包むように水が流れている
(2023年4月28日)



右上：400メートルほどの1枚の岩盤の上を流れる「神鈴の滝」。周囲にくらべてひらけたところで青空が広がっていた
(2023年5月28日)

右下：「白糸の滝」の下からはじまる小さな流れ。流れの幅は私の靴の大きさほどだった
(2023年4月28日)

盤だ。足元の小さな水たまりには、後ろ足が生えたオタマジャクシたちがひしめき合って泳いでいる。空を見上げると、明るい場所を好むアカマツが生えていた。

下見の滝

「白糸の滝」に向かおうと、さらに西へ進む。曲がりくねった山道を進んでいく。自転車を止めて5分ほど歩くと、狭い階段があらわれた。すぐ横が崖になっているので少し怖いが、頑丈な金属パイプの手すりのおかげで安心して登れる。足元はごつごつとした岩場になっていた。

目の前に、高い岩の壁が立ちはだかる。岩盤の上で、小さな流れが白く輝く「白糸の滝」に着いた。滝の下を見ると、小さな流れがはじまっている。この流れがだんだんと大きくなつて桂川かつらがわに合流する。そして、都留を通り、途中で相模川さがみと名を変えて神奈川県のの相模湾にそそぐ。この水が海まで流れていく途中で、多くの人の暮らしを支えているのだらうと想像を膨らませる。すると、視線の先を流れる何気ない水の流れが、特別な存在に見えてきた。

帰り道に「白糸の滝」のすぐ下を「下見の滝」という滝が流れていることに気がついた。「白糸の滝」に比べて滝幅が広いので、水の流れは観察しにくい。けれども、森のなかを貫く「下見の滝」は、木々に水を運んでいるように見えて、その光景に胸を打たれた。

周りに目を向けてみると、どうやら歩いてきたところも含めて岩盤に覆われているようだった。水が流れているところだけ岩が露出している。「白糸の滝」や「下見の滝」もひとつの大きな岩の上を流れているようだ。木々は浅い土壌の上に根を力強くはつている。たとえ絶壁の上に生えていたとしても、まっすぐに上を目指して生きる植物たちのすがたが目の前にあった。

「天の滝」あま 近くの大きな岩盤

地図で三つ峠駅ひがしかつらと東桂駅ひがしかつらの真ん中ななくらの場所に「天の滝」という滝を見つけた。「下見の滝」から4キロほど下流に行つたところにある。「天の滝」の上までやってきたものの、降りかたがどうにもわからない。自転車で少し進んでみると、フェンスの入り口があったので近寄ってみる。どうやら、クマやシカな

柄杓流川の地図



どの動物の侵入を防ぐために、柵が設置されているようだ。アーム式の錠を上げて入れた。なかに入つてのぞきこむと、15メートルほど下を柄杓流川が流れていた。ひんやりとした空気に覆われる。あまり人が通っていないからか、地面が滑りやすく、気をつけながら下り道を進んだ。岩場では木の幹にしつかりとつかまって降りていく。根元を見ると、根が岩の隙間に力強くはつていた。幹に体重をかけてみてもびくともしない。川まで降りてくると、少し湾曲した吊り橋があつた。吊り橋の上を歩いてみると少し揺れる。ゆらゆらと揺れる感覚と、川の下がよく見えるのが吊り橋の好きなどころだ。川の前に行き、両手で川の水をすくってみる。手を入れた瞬間、あまりの水の冷たさに毛細血管が縮こまった。木漏れ日で輝く柄杓流川の水面に、心が癒される。

目的の「天の滝」は2回目の観察のさいに行けたが、このときは道がわからなかった。来た道を登っている途中に、ふと見上げると、せりだした大きな岩が現れた。身体を反らせると、ようやく岩のてっぺんを見ることができた。いまにも倒れてきそうな勢いだ。ところどころ風化して、ひび割れや小さな穴ができていた。その隙間に植物が生えているところもある。岩の上には、ぎりぎりまで木々がせりだしていた。落ちないように近くの木に支えてもらっているようだ。誰かに見られるためでもなく、ただひっそりとたたずむ木々や大きな岩に心惹かれた。導かれるようにして、ここまで来たような気持ちになる。地図には載っていない秘密の場所を見つけることができて嬉しくなった。

川を歩いて見つけたもの

富士山が噴火したときに流れた溶岩を浸食して流れる柄杓流川には、夏狩から十日市場にかけて多くの湧水が流れ込んでいる。都留市では知る人も多い「太郎次郎の滝」もそのひとつだ。そんな湧水を見てみよう、長靴で柄杓流川を歩いてみることにした。

さつそく、長靴を片手に柄杓流川に降りられそうな場所はないかと柄杓流橋のあたりをさまよう。すると、私と同じように付近を散策している男性とすれ違った。2度目にその男性とすれ違ったときに、「川に降りられそうでしたか」と声をかけてみた。



左：十日市場付近の湧水が流れる滝。全部で5か所の湧水をみつけた。そのなかでも、お気に入りの場所だ
(2023年4月28日)

右：「天の滝」付近の大きな岩。ずっと眺めていると、顔のようにも見えてくる。10年後くらいには景勝地になっているかもしれない
(2023年5月28日)

男性は釣りが趣味で、釣りのインストラクターもしているという。いまは神奈川県厚木市に住んでいるが、親戚の家が西桂町にあり、幼いときから川で遊んでいたそう。川に入って観察をしたいという私に適切な服装や入りやすい場所を教えてください。「行ったらきつと楽しくなると思いますよ」という言葉に期待がふくらむ。そして、柄杓流川の川沿いは自然が広がっているのも、動物の痕跡を探してみるのも面白いと教えてもらった。

それから、何回かに分けて太郎次郎の滝から桂川に合流するまでの区間を歩く。あるときは一人で、あるときは編集部員と一緒に歩いた。転んで服が泥だらけになったり、ヘビを踏みそうになったりした。子どものように戻ったかのように楽しくなる。柄杓流川沿いに自生しているバイカモもたくさん見つけた。ほかにも、流れが穏やかなところでは、アユの稚魚たちが泳いでいた。小さな生きものたちが、冷たい水の流れる柄杓流川で懸命に生きるすがたが印象に残った。

柄杓流川を観察していると、湧水が流れる滝を多くみつけた。近づく、水しぶきが飛

んでくる。さつきまで暑かったのを忘れるほど、涼しい空気に身体が包まれた。周りに生える杉は茶色く、水分で少し柔らかくなっている。崖の表面をよく見てみると、層になっていた。富士山の溶岩の跡と思われる溶岩質の地層の上に、土砂が混ざった地層が重なっているようだ。地層によって、石の大きさが違っている。長い年月をかけて、いまの柄杓流川ができたことを感じさせてくれた。

* * *

「何気ない自然を、自分の目でいいいに観察したい」という想いで何度も柄杓流川を歩いた。一言で柄杓流川と言っても、地図に載っていない場所や、支流が多くある。しつかりと根をはって生きる木々や、柄杓流川で暮らす生きものをみつけた。そして、そんな自然を楽しむ人々と出会った。

はじめは川だけが書かれていた心のなかの地図がにぎやかになっていく。訪れた場所と、そこで出会った自然や人との記憶が結びつき、心に刻まれていく。歩いた場所の一つひとつが私にとって、記憶にとどめたい大切な存在になった。

釣竿に聞く



60年ほど前の都留の古写真に、十数人の人びとが川釣りをしているように写っていた。かれらは手作りの長い竹竿を使ってアユを釣っていたという。私も自分で竿を作って、釣りをしたい。そうして、かつて先人たちがこの川で釣りを通して何を考えていたのか、想像してみたいと思ったのだ。

釣り場を知る

4月29日の朝9時過ぎに川へ向かう。途中、水路に30センチほどの魚を見つけた。「ニジマスです。この位置（魚から3メートルくらい離れたところ）から釣るんです」と目の前のニジマスで釣りのようすを再現してくれたのは、西教生先生（41）だ。釣りの経験や道具作りの知識に富む

西先生が、竿作りから釣りのコツまで教えてくれるというので心強い。とはいえ、いざ魚を目の前にすると、こんなに大きな魚を、手作りの釣竿で持ち上げられる気がしなかった。川釣りでは川の下流から上流に移動しながら釣るのがふつうだという。下流のあたりにある竹林で竹を取り、竿を作ってから釣りに向かうことにした。

平均台ほどの狭さの土手を進む。土手の高さは3メートルくらいだろうか。この高さから川に落ちるのは怖いので、川が流れる反対側に体の重心を置きながらゆつくりと進んだ。今日は、下見のときに魚影が見えた箇所には魚はいないようだ。狙っていたスポットだったが、ほかに釣れそうな場所を探してみよう。

竿を作る

進むにつれて土手の高さが低くなり、川との距離が近づいてきた。草が開けたところにいったん荷物を置いてから、もう少し進んだ先の竹林で自分に合った長さや太さ、好みの形の竹を見つける。

竹は、切つてすぐは水分を含んでいて重い。切つてから数か月〜一年乾燥させるのが一般的だが、今回は乾燥させずに使う。竹林には多くの竹が生えていて、一本いっぽん長さや太さが違う。長いと遠くまで竿が届くぶん、扱いは難しい。太さも考えると重くて持つのが大変だ。さらに、先がまっすぐな竹と、下になるように曲がっている竹がある。迷ったが、私はできるだけ長くかつ片手でしっかりと握れる太さ

の、先がまっすぐな竹を選んだ。釣竿は持ち手がしっかりしていて先が長いイメージが強かったからだ。

お目当ての竹を、ノコギリを使って切り倒す。両手で持つてもなかなか重かった。剪定ばさみ（せんていばさみ）を使って余計な葉を切り落としていく。竿に使用する軸の部分を選んで切らないように慎重に笹を落としていった。先端についていた葉が切り落とされると、竹が根本から先端にかけてだんだん細くなっているのがわかり、すでに竿らしく見えた。

今回は「流し釣り」をする。「流し釣り」は、針を上流側に投げ、川の流れに任せて針を流し、引き上げてふたたび上流側に投げる。これを繰り返して魚を待つ漁法だ。先ほど作った竿で、針を投げる練習をする。竿を右手に持つて、左手で針の20センチほど上を持ち、下から投げる。狙った位置に向けて針を投げようとすると、利き手と反対の手で物を投げるのは難しい。で、この原理を使う



左：遊漁証を購入すると漁協組合が管轄する川で釣りができる。年間券（8000 円）と、当日券（1200 円）がある

右：上から、竹を切り倒すためのノコギリ、枝や節間の皮を剥くためのなた、枝を切り落とすための剪定ばさみ



なたを使って節間の皮を剥くようす



左から、釣り針、おもり、目印（毛糸）、釣り糸。目印は釣り針より上につけることで、釣り針の位置を知らせる。針り糸におもりをつけ、釣り針を沈みやすくしたり遠くに投げたりできる



左：エサとなるヒゲナガカワトビケラの幼虫。攻撃しないので安全に捕まえることができる
右：おもりは釣り糸を挟むように指で押してつける

「糸を振る」動作に近かった。下流から釣りをするが、まずは針につけるエサを用意しなければならぬ。獲るのはヒゲナガカワトビケラというトビケラの仲間の幼虫だ。浅瀬に降りて、幅20センチほどの石の裏に潜む幼虫を探す。西先生がひよいひよいと獲るのを見て、私も石をひっくり返すが幼虫はいない。西先生があつという間に10匹ほど捕

釣りを通して川を知る

また。自分でエサを取れなかったことにモヤモヤしつつ、捕まえてくだった幼虫を針につけ、いよいよ釣りに入る。

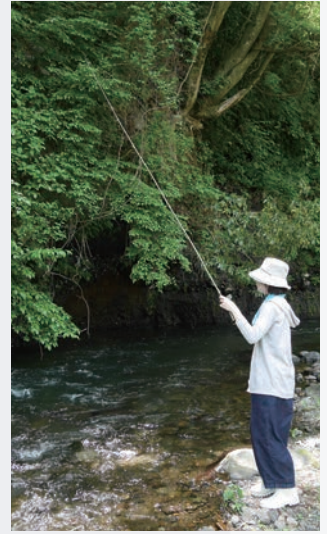
まずはエサを獲った浅瀬のあたりから始める。練習通りに竿を構え、糸を振った。一投目は狙った位置に針が落ちたものの、水の流れが速くすぐに下流へと流されてしまった。魚は流れが穏やかな場所や、すがたを隠しやすい岩場にいることが多いらしいので、岩が水の流れをさ

えぎっている場所を見つけてもう一度投げてみる。しかし、うまくいかずにまた針が流れに飲まれてしまった。数メートル上流に移動して竿を投げる。今度は、向こう岸に生えていた木の葉に糸が絡まった。

西先生に取ってもらい、もう一度投げるもまた同じ場所に絡まってしまった。針の先ばかり見えているからだろうか。練習では見えていたはずなのに、今は目の前のどこに糸が垂れているのかわからない。水面に日の光が反射して、川のどのあたりにエサが沈んでいるのかさえ見えない。

投げ直した針が葉に絡まるたび、まわりを見ることができていない自分にもどかしさを覚えた。

さらに上流へ移動し、先ほどより水深が深いところに来た。流れも緩やかなので狙いやすそうだ。それに、前に下見に来たときはこの辺りで大きな魚影を見かけた。柄杓流川は水の透明度が高く、遠くからでも魚のすがたが確認できる。ここで釣るぞ、と意気込んで竿を投げる。釣り糸につけた目印がゆつくりと下流へ流れていくのが見えた。糸が伸びきってからもう一度投げる。これを何度も



繰り返す。徐々に竿の扱いに慣れて気持ちに余裕が生まれたのか、竿を握る手に水の流れを感じられるようになってきた。水は上流から下流へ流れているだけでなく、川底と水面のあいだをうねるように動いている。魚をおびき寄せるように竿先を動かすことはせず、釣り糸で水の流れを撫でるようにして、できるだけ自然に任せて釣ることにした。

釣りを通して自分を知る

気づくと午後1時前だった。何も釣れていないが、とにかく今日は釣りを楽しんで、釣れたら運が良かったと思うくらいの心持ちでいようと思った。エサがなくなったのでいつ

た下流に戻り、今度は自分で浅瀬にエサを獲りに行く。エサを探している、下流から歩いてきた釣り人に遭遇した。いそいそと石をひっくり返す私を見て、「エサ釣りなんですね」と声をかけてくれた。魚影すら見つけれない、私には、すぐる思いで「この辺は何が釣れますか」と釣り人に聞き返す。「イワナやヤマメはよく釣れますよ」と答えてくれた。魚が釣れる希望が見えた。釣れなくても楽しめるればいいと思っていたけれど、魚を釣りたいという思いは消えていなかったようだ。

40分ほどかけてようやくエサが10匹近く集まった。さらに上流で釣りをするため、より長い竿を作ることにした。竹を選び、竿を作り直す。竿をもつて目的の場所に移動するまでに、糸を4、5回草木に引つ掛けた。やはり長いと扱いが難しい。

上流でも魚のすがたは見当たらず、透き通った水の底の石しか見えない。疲れからか、狙った位置に針を落とすことができなくなっていた。水の流れが強かったため、下流へ戻って釣ることになった。帰宅する時間を考えると、これが最後のチャンスだ。魚がエサをついついてるときとは違った手のひらの感触に、これまでにない緊張を感じる。手で

は確かに魚がいるのは確認できるが、すがたが見えない。針をつつかれた拍子に引き上げてみるも、魚はかからない。同じ場所に立ちながらも針を落とす場所を変えたり、何回か針をつつかれるまで待つてみたりなど、できる限りの工夫をした。

何回も針を流し、40分経って小さな魚がかかった。ぴちぴちと手の上で跳ねるアブラハヤを見る。はじめて魚を釣った嬉しさよりも、こんなにいきなりかかるのかという驚きのほうが大きかった。気づけば釣りを

始めてから5、6時間ほど経っていたが、「やつとかかったか」とは思わなかった。

釣りはひたすら待つものだと心得ていたし、何よりも、川が流れる音と鳥の声を聴きながら、竿を通して水と通じ合っている感覚がとても好きだった。釣りの知識や経験は浅いけれど、静かな空間でぼうつとするのが好きな私の性格は、釣りに向いているのかもしれない。釣ったアブラハヤを川に戻すころには、冷たい夕風が吹いていた。帰り道、行きで通った水路を見て、「ここにいたニジマスの方が簡単に釣れたのでは」と思った。「待つ」楽しみの、魚を釣りたい意欲もある私は、次の釣りも心から楽しめるはずだ。

きつと先人たちも、釣りを通して自分の素直な感情と向き合っていたのだろう。この釣竿が、私の正直な気持ち映る水面と私自身とを繋ぎ、気づかなかった思いを伝えてくれる。

原口桜子(学校教育学科2年)
〓文・写真



プールの監視員のように、高台から魚たちを見守っています



コラム

柄杓流川のカカシの秘密

はじめてこの川を訪れたとき、橋の上で1体のカカシが出迎えてくれた。川沿いを歩くと、ほかにもたくさんのカカシが立っている。いったい誰が、何のためにカカシを立てたのだろう。

ふもんじ 普門寺の住職で、都留漁協組合の広報担当でもある山崎^{かずお}さんにお話をうかがった。これらのカカシは、アユを守るための鳥よけだという。天敵のカワウがアユを食べてしまうのを防ぐためだ。害獣から野菜を守るために畑に立つカカシと役割は似ている。川の上で風になびくホログラムの短冊も、防鳥のためだ。

カカシの材料は漁協組合で用意したもので、組合のかたの不要になった服を着せているのだとか。また、かかしは毎年作り替えており、例年4月に、同じ場所に同じ数だけ設置している。柄杓流川～桂川～院辺橋のあたりにかけて約30体ほどのカカシが立っているそうだ。確認する限り、柄杓流川には11体のカカシが立っていた。(2023年5月3日現在)

私たちが豊かな環境で釣りができるのは、カカシたちのおかげだったのだ。そのことを知ってから、はじめは少し不気味に感じたカカシの表情が、頼もしく優しい表情に見えてきた。

短冊

今にも倒れてしまいそうなところを、まわりの木に支えられている



カカシも橋の上は寒いのか、重ね着をしている



笑っているのか泣いているのか不思議な表情に惹かれる



川岸に立つカカシ。釣りをしているとき、誰かに見られている気がして振り向くと見つけた (2023年5月3日)

私だけぼうしをかぶっていません。木陰にいるので熱中症の心配はありません



夜の森を見る

本学フィールドミュージアムに所蔵されているカワネズミの剥製。
日本で唯一、陸上と水中を生活の拠点とする哺乳類である
(2023年5月5日)



カワネズミという動物の名前を聞いたことがあるだろうか。名前にネズミとついているがモグラの仲間だ。日本各地の溪流に生息し、水のなかを自由自在に行き来する動物である。晴れた昼間に見ると銀色に見えることから、銀ネズミとも呼ばれる。地域交流研究センターの教授であり、私たちと本誌を作っている北垣憲仁先生はカワネズミの研究をされている。私がカワネズミを知ったきっかけのテレビ番組も、北垣先生が監修されたそうだ。カワネズミをじっさいに見てみたいと思ひ森に向かった。

カワネズミに会いに行く

カワネズミは、動きが素早い。そのため、川幅が狭く、獲物であるヤマメやサワガニが多く生息しているところで観察しやすいという。また、カワネズミは目が小さく、明るさを感知する程度の視力しかないそうなので、おもに感覚の鋭いひげを使って狩りをする。視力に頼らないので、時間に関係なく動くことができるが、そのなかでも夕方から夜間の活動がもっともさかんになるそうだ。

4月22日にはじめてカワネズミの観察をした。場所は柄杓流川しやくながれがわのなかでも東桂ひがしかつらと西桂にしきつら町に位置する湯の沢だ。ここは北垣先生がはじめてカワネズミを観察したところだそう。2時間ほどかけて行すが、これは人が森のなかに長時間いることで、動物たちのストレスにならないようにするためだ。観察というと、1日かけて行う印象があったので、思いのほか短いことに驚いた。カワネズミを見ることはできるだろうか。ソワソワしながら湯の沢に向かった。

ダウンジャケットに長靴と、防寒対策を万全にする。車を降りたとたん、激しく降る雨



今回の観察場所。左上の丸の30センチほどの段差が、カワネズミがもっとも観察しやすい場所だという (2023年4月22日)

に似た、柄杓流川の音が聞こえる。奥に見える森は薄闇におおわれ、なんとなく不気味だ。川を越え、その支流をさかのぼっている途中に、フジの木の枝が青い花をつけて垂れ下がっていた。フジの花といえば、藤色という色があるように淡い紫色の印象があったが、ずいぶん青みがかっていて意外だった。

3分ほど歩くと、観察にちょうどよきようなところを見つけた。川幅は2メートルほどで、30センチほどの段差から水が勢いよく落ちる音がする。さっそく川に降り、準備をは

じめる。赤いフィルターがかかったライトとLEDライトを取り出す。赤い光は動物を刺激しないらしい。準備をしていると、北垣先生が後ろの岩にオートミールを置いていた。オートミールにつられてやってきたアカネズミなどの野ネズミの観察も同時に行うそう。気づけばあたりは暗くなっている。腕時計の針がどこを指しているのか見えない。目を近づけてみると、18時43分を指していた。わずか10分足らずで日は沈んでしまったことに、時間の早さを感じた。

夜を迎える

それからしばらく経ち、いよいよ森が闇に包まれたので、赤いライトの光をつける。真っ暗だった世界にぼんやりと輪郭が帰ってくる。しかし、あたりを照らすには心もとない。視覚が使えなくなつたぶん、ほかの感覚が研ぎ澄まされていく。耳をすますと、川の音はひとつではないことに気づく。水を掻きわけるような音や、跳ねる音が聞こえてくる。そのなかでも一番大きく聞こえるのは水が落ちる音だ。すん、と鼻を鳴らせば、水と土のにおいが肺の奥深くまで広がる。地元の緑日

のにおいに似ている気がして、懐かしさがこみあげた。

ふと、都留に来たばかりのころに東桂でクマが出たという防災無線の放送を聞いたのを思い出した。おそろおそろの見回してみるのが、もしクマが出ても気づかないだろうなと思うほど真っ暗で、何も見えない。望みを託すように、懐中電灯をギュッと握りしめる。真っ暗な世界で、知らない世界にひとり置いていかれたような気持ちにとらわれる。せめて音で分かたらないかと耳をそばだててみても、川の音しか聞こえない。五感が研ぎ澄まされているのか、麻痺しているのかわからない。自分という存在すらあやふやになつてしまふ気がした。

とうとうメモ帳に文字を書くのが難しくなるほどあたりが暗くなつてしまったので、携帯電話にメモをしようと電源をつける。画面の光を一番弱くするが、それでも直接見るのがためらわれるくらい眩しい。観察をはじめてから1時間が経とうとしていた。

遠くで飛行機の飛ぶ音がかすかに聞こえる。人の気配にほっと息をついた。人工の音が恋しくなつたのは、はじめての経験だった。

かわいい来訪者

またしばらく観察をしていると、北垣先生に声をかけられた。振り返ると、用意していたオートミールにネズミがやってきていた。片手に乗るほどの大きさと、指先と腹が白い。オートミールから少し距離を取り、体を伸ばしてすばやく取ると、元の位置に戻り両手で食べている。その愛らしい見た目や仕草に自然と笑みが浮かぶ。

19時50分。観察もあと10分だ。かわいい来訪者に緊張がほぐれたのか、今まであった、森に飲みこまれそうな不安がなくなっていることに気づいた。空を見上げれば、灰色の雲が浮かんでいる。遠近感さえわからなくなるほど暗い森よりも、空のほうが明るい。もし晴れていたらどのように見えるのだろうか。次の観察に期待が高まった。

観察の終了する時間になった。ずっと怖いと思っていたはずなのに、この場所を去ることに名残惜しさを感じる。車内灯や、いつもなら頼りないと感じる街灯の明かりさえ、眩しくて目を細めてしまふ。国道139号線なんて、光の洪水のようだった。

はじめてづくしの夜

5月16日にふたたび湯の沢を訪れた。19時、空は暗い青に染まっている。前回よりさらに奥の養魚場の川沿いに腰をおろした。昼間は汗ばむほどの陽気だったので夜もそこまで寒くならないだろうと思っていたが、観察をはじめて早々にダウンジャケットを羽織る。日が沈み、あたりは闇に包まれたが、この前ほどの孤独は感じない。聞こえてくる川の音に私なりのオノマトペを考える余裕さえある。川の上流からは、ドボドボという勢いのよい音、目の前ではダブルダブルという三拍子、下流からは細い氷が折れるようなパリパリという音が聞こえる。

しばらく夜の森を味わっていると、「カワネズミ！」と北垣先生が声をあげた。白い光が水面を照らす。しかし、私の目には今までと変わらない川の流れしか映らない。上流から流れてきたカワネズミは、流れの強いところを通っていったという。見られなかったことをもどかしく思った。

観察の時間は残り30分ほどしかない。もう一度現れるかどうか焦りがうまれる。今まで



観察場所の近くで見つけたシカの足跡。地面をよく見てみると、いろいろな動物の生活の跡を見ることができる (2023年5月16日)

より前のめりになって川を見つめる。時計を見るとあと5分。これはもう現れないと諦めかけた、その瞬間だった。目の前を、銀色の丸い何かが走り抜けていった。夢中になって上流のほうに光を向ける。ライトに反射したその背中が川の上を跳ねた。カワネズミだ。拳ほどの大きさで、たしかに名前の通りネズミに似ている。下流から現れたカワネズミは手を伸ばせば届きそうなほど近くを横切ると、あつという間に闇へと消えていった。まるで夢幻のようだった。

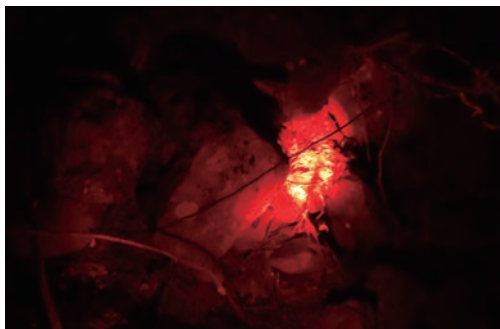
観察を終え、駐車場に戻る途中に空を見上げると、雲ひとつない空に星が輝いていた。想像していた以上の輝きに、わああと声が漏れる。さつきまで観察をしていたほうから、キューンというシカの高い声が聞こえた。カワネズミや満天の星空、シカの声のどれも今まで経験したことのない、はじめてづくしの夜だった。

* * *

二度にわたる観察で、念願だったカワネズミを見ることができた。それはもちろん貴重な経験だ。しかし何よりも、夜の森そのものが、私の心を強く揺さぶった。はじめは何も見えない夜の森に不安や緊張ばかり抱いていた。しかし水の奏でるさまざまな音や、森の匂いに意識を傾けると、だんだんそのすがたがわかるようになった。私が怖いと感じたのは、夜の森を警戒していたからだろう。ふたたび森を訪れたときに孤独を感じなかったのは、森に親しみが芽生えたからだ。自分が心を開いたとき、はじめて相手にも受け入れられるのだと、夜の森の観察は教えてくれた。

コラム 夜の森で比べる

赤い光は動物を刺激しないというが、いったいどのくらい見えかたが変わるのだろうか。赤色の懐中電灯と LED の懐中電灯を付け比べてみた。



赤色の光

岩の影がぼんやりと浮かび上がり、照らされている部分は狭い。目に自然と入ってくる優しい光である。この明かりだけでメモを取るのはかなり難しかった。

(2023 年 4 月 22 日)



LED の光

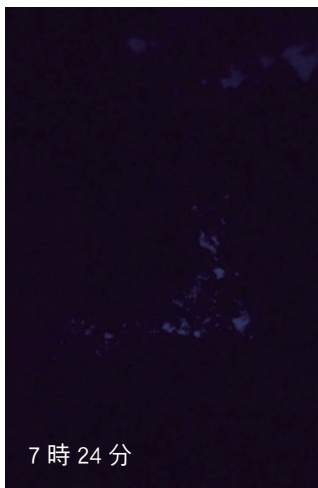
白い光で、はっきりと立体的に見える。思わず目を細めてしまうようなチカチカと眩しい光だ。照らされている部分は広く、水のなかでは青白く見えた。

(2023 年 4 月 22 日)

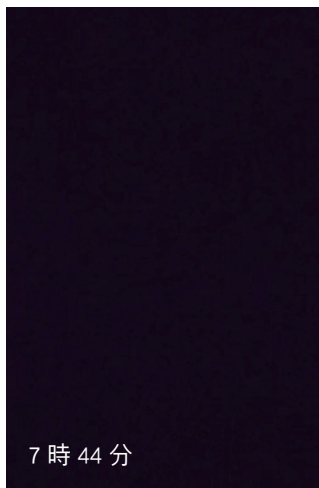
夕方、空は刻々と色を変えていく。いったいどのくらいで闇に包まれるのだろうか。観察している場所から空を見上げてみた。



7 時 15 分



7 時 24 分



7 時 44 分

わずか 30 分のあいだにあたりは真っ暗になってしまった。森のなかから空を見上げると、いつもより空が明るく感じる。
(2023 年 5 月 16 日)

フィールド暦

ー水辺で暮らす生きものたちー

水辺にはふだん見かけることの少ない生きものが暮らしています。今号では、^{しゃくなげがわ}柄杓流川と本学 4 号館の編集室前にある水辺で見つけた生きものたちを紹介します。 本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



コミスジ (2023 年 6 月 17 日)

タテハチョウの仲間です。^{はね}翅に斜めに走る白い帯があり、翅を開くと帯模様が「三」の字に見えます。成虫は 4 月から 11 月まで長い期間見られます。



ヒメウラナミジャノメ (2023 年 6 月 18 日)

柄杓流川の草の上を飛んでいました。目玉模様があります。モンシロチョウよりも少し小さいようです。幼虫はススキなどイネ科植物を食べます。



ヒカゲチョウ (2023 年 6 月 18 日)

柄杓流川にある雑木林の縁で出会いました。薄茶色の蝶で、裏面に目玉模様があります。樹液を吸っていました。幼虫の食草はタケやササ類です。



テングチョウ (2023 年 6 月 18 日)

成虫の頭部が天狗の鼻のように前方に伸びていることからこの名が付けられたようです。幼虫はエノキなどを食草としています。成虫で越冬します。



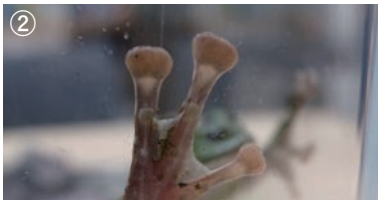
ダビドサナエ (2023 年 6 月 18 日)

日本の特産種です。成虫は 50mm 程度で、胸の側面に黒い筋が 2 本入ります。水質のきれいな上流域に生息し、成虫になるまで 2 年かかります。



ミヤマカワトンボ (2023 年 6 月 18 日)

日本の特産種で、世界でも屈指の大きさのカワトンボです。翅が一様に淡い褐色で、ほかにこのようなカワトンボはいないため容易に区別できます。



モリアオガエル

ー編集室前の水辺でモリアオガエルが産卵しましたー

アオガエル属に分類されるカエルです (①)。日本固有種 (※) で、本州と佐渡島^{さどがしま}に分布していますが、四国と九州の分布ははっきりしていません。体長はオスが60mm ほど、メスが80mm ほどでメスのほうが大きいです。指先には吸盤があり (②)、木の上での生活に適応しています。カエルは水中に産卵するものがほとんどですが、モリアオガエルは、木の枝などに、粘液でできた泡に包まれた卵塊^{らんかい}を産みつけます。全国的に生息数が減っている場所が多いようです。福島県や岩手県には天然記念物に指定されている繁殖地があります。そんなモリアオガエルが、今年始めて編集室の前に設置している池で産卵しました (③)。なぜ、この小さな池に産卵したのでしょうか。今後のようすを見守っていきます。

①モリアオガエル (2013 年 6 月 27 日 都留市鹿留)

②モリアオガエルの吸盤 (2013 年 6 月 27 日 都留市鹿留)

③モリアオガエルの卵塊 (2023 年 6 月 23 日 本学 4 号館の編集室前)

イラクサ (2023 年 4 月 29 日 柄杓流川)

イラクサ科イラクサ属の多年草です。葉と茎にトゲ (刺毛^{しもう}) があります。学名は *Urtica thunbergiana* で、イラクサ科を示す *Urtica* は、ラテン語で「チクチクする」という意味だそうです。この植物は薬用にも使われるようです。

ー編集部員のイラクサ体験談ー

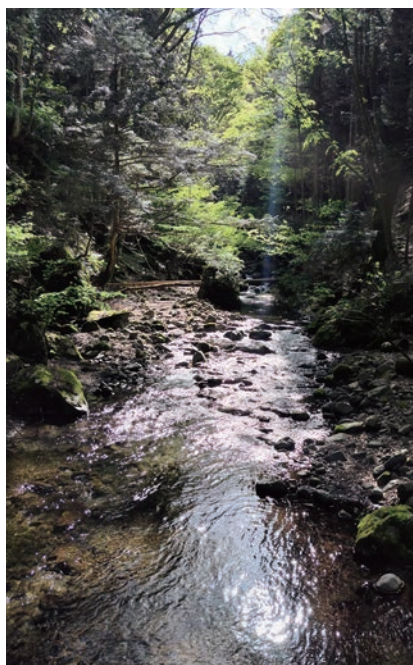
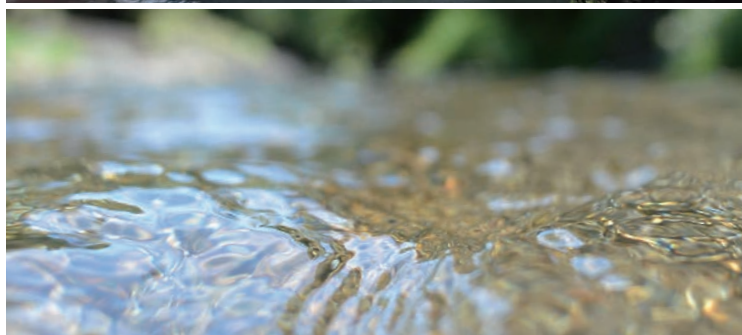
柄杓流川の岸辺を歩いていると、突然足に痛みが走った。見てみると、ちょうど靴とズボンのあいだが赤みを帯びている。虫に刺されたのかと思い、同行していた教員に聞いてみるとイラクサではないかとおっしゃった。チクチクとした痛みで、撫でてみると火傷のときのように感覚がない。その痛みは半日ほど続いた。あとで調べてみると、イラクサの粘液が痛みの原因であるため、痛みを感じたらすぐに水で洗い流すとよいそうだ。





特集

柄杓流川



川を歩き、もともと持っていた興味が深まるなかで、
知りたかったことに少しだけ近づけた気がします

川沿いを歩くと、こころに残る場所を見つけました

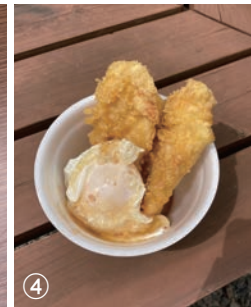
釣りをすると、素直な感情に気づきました

夜をのぞくと、森と川のはざまで暮らす生きものを観察できました

そして、「知りたい」気持ちを大切にすると、のしさを味わいました

これからもあふれ続ける「知りたい」を糧に、
自分らしいやりかたで都留を観察していきます

あたたかさにつれる



①ほえむ誕生仏 ②甘茶を片手に談笑する人びと ③会場で配られていた甘茶 ④まる屋さんの「とり天」

前号で取材をした保寿院の住職である小宮山壽芳さん（63）が、花まつりのことを教えてくださった。私は、はじめて聞くこの行事に興味を惹かれた。どのような意味が込められたまつりなのだろう。夏狩にある耕雲院で行われる花まつりに参加することにした。

変化した在りかた

花まつり当日を迎える前に基本の知識を持つておきたくて、耕雲院にお話をうかがいに行った。耕雲院は、本学から自転車で15分ほど西へ向かった先にある。取材の日である3月31日、下り坂と上り坂が交互につづく道を自転車で漕いでいく。途中で足が痛くなり自転車を押しながら歩いていると、地面に咲く花を見つけた。花まつりの取材前に花を見つけたことに少し嬉しくなる。気を取り直して向かうと、耕雲院の入り口が見えてくる。入り口から境内につづく一本道が私を出迎えてくれた。

お話をうかがったのは耕雲院の副住職である河口智賢さん（44）。よく通る声とたくましい笑顔にこちらにも明るい気持ちになる。玄関を入ってすぐ横にある小さな部屋に案内していただき、さっそく取材を始めた。

花まつりとはお釈迦様の生誕を祝うまつりのことだ。毎年、お釈迦様の生誕日である4月8日に行われる。人びとは花御堂と呼ばれるお堂のなかにある誕生仏に甘茶をかけることで生誕を祝う。耕雲院で花まつりが始まったのは、今から30年前の1993年らしい。私が生まれる前から続いているということにとっても驚いた。

30年という長い月日のなかで耕雲院の花まつりの在りかたは大きく変わったそう。きっかけに、社会全体のお寺の在りかたや、人びとのお寺に対する意識の変化がある。河口さんがおっしゃるには、30年前は現在よりもお寺と地域は密接な関係にあったそう。しかし、ときが流れる

につれて「お寺離れ」や「寺院消滅」といった言葉をよく耳にするようになった。以前、編集部員の取材に同行して他のお寺を訪れたさいにも、取材先のかたがこうしたことを語っていたのを思い出す。それほど寺院にとつてお寺の在りかたは大きな課題となっているのだ。

耕雲院ではこうした状況を変えるため、耕雲院の花まつりの形態や目的を変えることにした。転機となったのは今から6年前の2018年だという。お釈迦様の生誕を祝うことが目的のこのまつりを、地域のかたに楽しんでもらえるような、地域のためのまつりへと目的を変えたのだ。ひとつの取り組みとして、さまざまなイベントを取り入れているそう。例えば、地域のかたによるマルシェや寺ヨガと呼ばれる体験型のイベントがある。私は大学生になってはじめてマルシェのことを知った。しかし、まだ行ったことがなかったためどのようなものか気になっ

ていた。花まつりを通してマルシェも楽しむことができるかもしれないと心が弾んだ。

取材の途中で、河口さんが過去に行われた花まつりの動画や写真を見せてくださった。動画から聞こえる楽しげな声に胸が高鳴る。そのなかでもひととき目を引いたのは、夜空に大きく咲く無数の花火の動画だった。色とりどりの花火の美しさと勢いに目を奪われる。私の地元ではこんなにも盛大に花火を打ち上げることはなかった。そのため、花火の美しさを味わうことができる都留が少しうらやましくなった。

「花火は地域のかたが上げているのですか」と気になってうかがうと、「僕の弟です」と河口さんはおっしゃった。お寺としてはもちろん、兄弟で花まつりを盛り上げていこうと努力するように心を打たれた。耕雲院では花まつりが行われるさいに花火も打ち上げられる。今年は花まつりのときに打ち上げないが、10

月にある秋まつりで打ち上げるそう。「ぜひ、花火を見に来てください。」そうおっしゃる河口さんの顔には笑顔があふれていた。花火が好きな私は、「絶対に見に行こう」と心に決める。秋の楽しみがひとつ増えた。

今年の耕雲院の花まつりでは「お寺でゆっくり一日中」がテーマだ。日常から離れてゆったりと過ごしてほしいという思いが込められている。はじめての花まつりに期待が膨らんで当日まで待ちきれない。

ゆったりとしたひととき

いよいよ花まつり当日になった。私と編集部員二人で、東桂^{ひがしかる}駅から耕雲院へ向かう。前日は雨予報だったため天気が少し心配だったが、この心配を消し去るほど空は明るい。東桂駅から10分ほど歩いたところで花まつりと書かれた大きな白い看板が私たちを出迎えてくれた。少し早く着いてしまったが、さつそく境内の

ほうへ行ってみることにした。

境内に入ると、親子連れや大学生が早くもベンチに座って話をしていった。そのまわりで、屋台やマルシェの準備をしているかたがたの楽しげな話し声や笑い声も聞こえてくる。すでににぎやかな雰囲気胸が弾む。どのようなお店があるのか。そう思い、屋台の横にある旗を見る。旗には私がずつと行ってみたかったお店の名前が書かれていた。「菊池わさび園」さん、「お惣菜まんじゅう藤江」さん、「走る天ぷらまるや」さんなど、この地域ならではのお店



当日の入り口のようす。快晴で空が眩しい

だ。他にも、本学の学生が主体となつて行く、つるつ子プロジェクトによる、つる食堂のスタッフのみなさんも準備をしていた。

11時から始まる大祈^{だいき}禱^{とうえ}会まで少し時間があつたため、屋台をまわることにした。まずは藤江さんのおまんじゅうだ。あんこの一般的なものから、じゃがバターやなすなど、はじめて見るものまでずらりと並んでいる。味の種類の豊富さに優柔不断な私はどれにするか迷ってしまう。やつと決めることができ、おまんじゅうを購入する。私はかぼちゃと



お惣菜まんじゅう藤江さんのおまんじゅう。ひとつずついいに包まれていた

さつまいもを、編集部員二人は切り干し大根となすのおまんじゅうをいただいた。柔らかな生地と優しい味が癖になりそうだ。次にまるやさんのとり天をいただく。ポリウームのあるとり天とまろやかな半熟卵が合わさって、私たちの頬を緩めた。

ベンチに座つてとり天を頬張つてみると、近くにいた男性が「甘茶飲みましたか」と声をかけてくださつた。紙コップに入つた甘茶を受け取ると、甘茶のあたたかさがじんわりと指先に伝わつてきた。はじめて見る甘茶にどのような味がするのかと想像する。さつそくいただと、砂糖とはまた違つた甘さが口のなかに広がる。甘いものが好きな私は、こういういった甘さもあるのかとはつとさせられた。

編集部員二人が「のんびりとできる感じがいいね」「全然宗教っぽさを感じないね」とこぼす。耕雲院の花まつりがめざすことを事前に二人には伝えていなかった。二人の言葉

で、耕雲院の花まつりがゆつたりさを伝えられていることに気づいた。

非日常を味わう

耕雲院の花まつりで一番のみどころである萬燈^{まんとう}大祈禱^{だいきとう}会が始まる。この名前は「万灯供養」と「大祈禱」をかけあわせて名づけた耕雲院オリジナルの祈禱だ。みどころは300本のろうそくである。祈禱のあいだ、電気などの照明はすべて消され、ろうそくの灯りだけが頼りになる。たくさんさんのろうそくが灯るなかでふと目を開けたときに、見えてくる世界と向き合つてほしいという意味が込められているらしい。「非日常を体験してほしいです。」取材でこう語つていた河口さんの言葉が頭をよぎつた。どのような体験をすることができるのだろう。

どこから入れば良いのか迷っている私たちに、若い女性が「こちらのほうへどうぞ」と声をかけてくださった。はじめての祈禱への緊張と



経文をめくっているようす。パラパラという音が部屋のなかに響き渡る

わくわくした気持ちが混ざり合つた感情が私を包みこむ。落ち着かない気持ちのまま祈禱が行われる部屋につづく廊下を歩いて行つた。

部屋に到着して足を踏み入れる。足元を見ていた顔を上げた途端、たくさんさんのろうそくの灯りが私の目に飛び込んできた。あたり一面がオレンジ色に染まっている。ろうそくの小さな灯りを消さないよう注意を払いながらそつと座席へ向かう。先ほどまでのにぎやかであたたかい雰囲気とは一転、静かで厳かな雰囲気か私を包み込んだ。

しばらくして、河口さんを含めた複数人の住職さんたちによる掛け声とともに大祈祷が始まった。住職さんたちがすさまじい勢いで経文をめくる音と、経文を読む大きな声が部屋の中に響き渡る。勢いと声に圧倒されて思わず私の背筋も伸びる。住職さんたちを囲むように300本のろうそくの灯りも揺れている。一本の小さな灯りが300本も集まるとこんなにも熱くなるのか。驚きのあまり何も声を出すことができなかった。

大祈祷会が終わり、ひとりの住職さんが終わりのあいさつをする。ここでは、コロナ禍のあいだ、花まつりが思うようにできなかったことを話していた。

河口さんがろうそくを一つずつ消し始める。先ほどまでオレンジ色に染まっていた目の前が、だんだん薄暗くなっていた。祈祷が終わったことに少し寂しい気持ちになる。河口さんが「ぜひ、ろうそくを持つ帰っ

てください」と声かけをしていた。私は河口さんの言葉に甘えて4本ももらってしまう。ろうそくを見るたびに祈祷のことを思い出すことができるかもしれない。そう心を踊らせて部屋を後にした。

向き合う

最後に甘茶がけをするために、花御堂がある場所へ向かった。お堂は先ほど祈祷が行われた部屋の外にある。私の身長よりも半分ほどの大きさである白い象の上に花御堂が置かれていた。これは白象しろぞうと呼ばれるもので花まつりの必需品だ。お堂に飾られる花は、まつりを行うさいに寺に咲いている花を使っているそう。花御堂の華やかさに、私だけでなく、その場にいた人たちも目を惹きつけられていた。

さつそく甘茶がけをする。白象の横に備え付けられていた木製の白い台に上り、花御堂のなかを覗き込む。甘茶のやさしい甘い香りが鼻の奥を

すーつと通り抜けた。一杯、二杯と器のなかにある甘茶を、小さな杓しやくですくつてゆつくりと誕生仏にかけていく。生誕を祝うというと大人数で盛大にやるというイメージがあった。しかし、祝いの言葉を交わさずに黙々と一対一で向き合う祝いかたもあるのだと気づいた。

* * *

帰り道、ゆつたりと過ごせる時間がもう終わってしまったのかと名残惜しくなる。振り返ると、どの場面を切り取っても、地域やお店のかた

どうしが分け隔てなく話していたことを思い出す。そして、初対面の私たちにも気さくに声をかけくださっていた。なぜ、こんなにも人と人の距離が近くてあたたかさを感じるのか。きつと耕雲院が地域のために尽力し続け、それを支えるように地域の協力があるからだろう。そこには、自然とあたたかさの輪が広がっているのかもしれない。耕雲院の花まつりはこれからも地域のかたがたに愛され、互いにあたたかさを分け与える行事になるだろう。

原優希（国際教育学科2年）
文・写真



耕運院の中心に置かれた白象と花御堂。誕生仏は小さいけれども、像の迫力と花の鮮やかさが目を惹きつける



おりみず
Cafe 織水を営む若林さん夫婦。「恥ずかしい」と言いつつカウンターから顔をのぞかせてくださった（2023年6月8日）

「今日はカフェに 行ってみよう」

「おひさしぶりです」と挨拶をしてカフェに入ると、^{わかばやしまさひこ}若林昌彦さん（54）が「おかえりなさい」と笑顔で出迎えてくれた。店内は軽快なジャズ音楽がかかっている。^{おちあいすいろきょう}落合水路橋に面した大きな窓からは柔らかな日が差し込む。キッチンからは^{ゆみこ}由実子さん（54）が野菜を切るトントンという音と織水カレーの独特でスパイシーな香りがする。ゆっくりと時間が流れるこの空間に、いつもうっとりしてしまう。

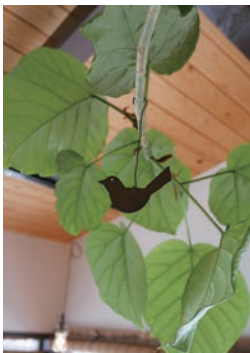


右上：菅野川に架かる落合水路橋。レンガが雨に濡れると渋い色合いになる
(2023年6月24日)

左上：17時頃撮った写真。大きな窓のおかげで夕方まで日光が店内に入る
(2023年5月28日)

右下：お祝いやプレゼントで貰った生花をドライフラワーにして飾っている (2023年6月8日)

左下：見つけたらラッキーな小鳥さん。店内2か所に飾られている (2023年6月24日)



カフェという場所

Cafe 織水 おりみず

物を昌彦さんが改築して2019年にオープンした。こだわりは店内の構造だけでなく、立地だそうだ。「水辺のカフェって憧れない」と昌彦さんは楽しそうにおっしゃった。地図を見ると、朝日川と菅野川、そして桂川に合流する細い川に囲まれていることが分かる。また、都留は昔から織物が盛んなまちであることを教えてくださった。織物を織る糸のように川の水が交わる場所だから、カフェの名前を「織水」にしたらしい。都留の伝統と自然を感じられるこの場所で何かをやりたいと、20年近く考えていたそう。

なぜカフェにしたのか気になって聞いてみると、「カフェは人が集える場所だし、打ち解け合える場所だと思う。それに、わざわざ来てもらえる場所だね」と答えてくださった。それから、カフェは「非現実的なところがある」という。その言葉をじっくり考えてみた。カフェにはたくさんのお客さんが来る。ランチをする人、友人と待ち合わせをする人、ひとりでゆっくり過ごす人、カフェに来る目的

はさまざま。カフェはそれらの目的をすべてかなえることができる。日常にそのような空間があったらどうか。昌彦さんの言葉の意味が分かった気がした。

「やってみたい」をやってみる

カフェをオープンしたとき、お客さんが来てくれるのかどうか、長く続けていけるのか、イメージでできなかったそう。「お店はイメージ通りに作ったけどね」昌彦さんは苦笑いを浮かべた。店内を見渡すと、木材を基調とした空間で、一組のお客さんがアイスを食べながらおしゃべりをしている。私が座っているカウンター席のあたりには、ドライフラワーが飾られてひかえめな彩りを与えていた。こは小さな森のようだ。「私はこの空間、すごく素敵だと思います」と伝えると、昌彦さんはうれしそうに微笑んだ。「やりたいようにやっていつて、それをお客さんがどう楽しんでくれるか自分でも楽しみ」。昌彦さんは、不安よりも実現したいという思いを強く持っているのだろう。不安さえも楽しもうとする姿勢は簡単にまねをすることはできないが、私も心がけてみよう。

昌彦さんの作り出した空間はとても居心地がいい。「なんだか言葉にはできないけれど、ずっと居たくなる感じ」と素直な気持ちが思わずこぼれた。すると昌彦さんが「言葉にできちゃうのは違う。言葉にできない居心地のよさが自然で、正解」とおっしゃった。昌彦さんのなかでは、どのような空間が人びとを惹きつけ、穏やかな気分になさせてくれるのかはつきりしている。それは実現したい目標や理想となつて、昌彦さんの好奇心をくすぐっているのだ。

今は、外にデッキを作っているそう。原動力は「やってみたい」という気持ちだ。自分の気持ちに素直になつて、やってみることに楽しさで（さ）織水は満ちている。

おいしいとうれしい

織水では、ヴィーガン料理を提供している。これまで私は、「健康に良い食べ物には味が薄そう」、「物足りない気がしてしまいそう」という偏見を少し持っていた。しかし、織水の料理はお腹も心も満たされる。とくに、スイーツはふんわりとした優しい甘さが口に広がっていく。

スイーツのアイデアを考えているのは由実子さんだ。もともと食べることは好きだったが、料理はあまり得意ではなかったらしい。しかし、体調を崩したことがきっかけで、健康と食事に興味を持ったという。

由実子さんは東京の料理教室に通っている。学んでいるのはジャパンスヴィーガンというらしい。炊いた穀物を、海の塩や味噌、醤油など日本の伝統食材を使って食べるのが特徴だ。「いろんな食事を試してきたけれど、体に合わないが続けるのがつらくなってしまう」。健康によい食事とは、栄養価が高いだけではなく、自分の体との相性が大切だということをはじめて知った。

真剣に自然食を学ぶ由実子さんのすがたは、研究熱心という言葉を連想させる。「おいしいものがさ、健康によかつたらうれしくない」由実子さんの目は、もつと知りたいという気持ちと新しいスイーツのアイデアでワクワクしているように見えた。こちらまで夢中になれるなかを探したくなる。知りたい気持ちのワクワクを由実子さんは教えてくださった。私の心はどんなものに惹かれるのだろう。

由実子さんは今年の1月から月に2回ほど料理教室を開いている。自然食と出会った経緯や、学び続けているからこそ実感できる「人は食べた物でできている」ということを伝えたいという。料理教室の参加者からは「自然の食材は優しい甘さですね」とよく言われるらしい。私が織水のスイーツを食べたとき感じたことと同じだ。けれども、甘味を含む食材を使っていることだけが「優しい甘さ」



料理教室のようす。雑穀が主役のおかずやスイーツを作って自然食の魅力を学べる（若林さん=写真提供）



上：お手伝いをしている時に、昌彦さんが撮ってくださった写真。お店の雰囲気に溶け込めているだろうか（若林さん＝写真提供）

下：ピーズとモリンガの五穀甘酒スムージー。砂糖を使用していないが、まるやかな甘みを感じられる（2023年6月8日）

の理由ではない気がする。健康を思いやる優しい気持ちで由美子さんのスイーツからは感じられるのだ。

私の「やってみたい」こと

織水のキッチンには、たまに若林さん夫婦の友だちや知り合いのかたがエプロンを着けて立っていることがある。じつは、私もそのひとりだ。由美子さんが不在のときにキッチンの仕事を手伝っている。きつかけは人それぞれで、私は織水を訪れ、若林さん夫婦と出会ったことがきっかけだ。昌彦さんは「気軽に頼り合える、ファミリーのような関係だと思っ

ている」という。

私は小さな頃からカフェの店員に憧れを持っていた。扉を開けるとのんびりとしたカフェの雰囲気に溶け込んでずっと待っていていたかのような安心感を与えてくれる存在だ。私の将来になりたい職業で、トップ3に入る。「興味があるならお手伝いやってみる？」唐突な昌彦さんの提案に、「やってみたくです」とすぐさま反応してしまった。

お手伝いは、私の夢をかなえるだけにとどまらない。同じように織水でお手伝いをする地域のかたと出会うことができた。一緒に作業をして一日が終わると、以前からお互いを

知る仲間のように思える。それから、店内に置いてある『フィールド・ノート』を手に取ってくださったお客さんとお話をする機会もある。読者のかたから直接感想をいただく機会も、あたたかい言葉をいただくことも、お手伝いをしていたからこそその体験だ。勇気を出して踏み出した一歩が、三步、十歩と増えていく。若林さん夫婦は、私の手をとって一緒に歩いてくれている気がした。

「自分がやりたいことをやっているから、お客さんのやりたいことはかなえてあげたい」という若林さん夫婦の想いは、私の夢を現実にくれた。

* * *

カウンター席でコーヒーを飲んで、一息ついた。アパートに帰ったら自分でもコーヒーを淹れてみよう。心に小さく灯がともる。若林さん夫婦に出会って、大切なのはこの「やってみよう」という気持ちだということに気がついた。小さな灯が不安や自信の無さに消されてしまいう前に、まずは行動をおこしてみよう。その経験はきつと、次も「やってみよう」とする私の背中を押すはずだ。

ちよつと出かけてみよう、都留を歩く。

初夏の風がここちよい。





ふと空を見上げると良い天気だった。
午後からは授業がないので、自転車で
出かけてみる。行き先も決めずに、た
だなんとなくペダルをこぐ。自転車を
止めて歩いていくと、青空をチョウが
飛んでいた。都留市夏狩の中央自動車
道の側道より撮影 (2023 年 5 月 24 日)



ちいさい都留、見つけた

期待と不安が入り混じる
新しい生活がはじまりました

まだ都留のことはよく分からないから
知りたい気持ちのままに
まちを歩いてみます

音に耳をすませ
うんと匂いをかぎ
じっと目を凝らし
手に持って触れることで



都留のささやかで、
すてきなところに気づきました

そして、その発見を
「ちいさい都留」と呼ぶことにしました

私たちが見つけた
9つの「ちいさい都留」をお届けします

もくじ

- | | | | |
|----|---------|----|------------|
| 36 | 川沿いの出会い | 40 | 足元の小さな発見から |
| 37 | 赤い架け橋 | 41 | 静寂を知る |
| 38 | 耳を澄ませる | 42 | 都留 note |
| 39 | 春陽を歩く | 43 | 踏切の先に |
| | | 44 | 私を動かすもの |
-

川沿いの出会い

カメたちに出会ったのは、都留のまちに引越してきた3月末のことだ。自宅から歩いて10分ほどの谷村町駅近くを流れる家中川のなかに、そのすがたを見つけた。水の上には、カメたちが過ごすための小さな木製の台が置いてある。まちなかの用水路にカメがいるなんて、はじめて目にした光景だった。

最初の出会いは約1か月が過ぎたころ、ふたたびカメたちのようすを見に出かけた。まぶしい日差しが照りつけるなか、どんなふうに過ごしているのだろう。わくわくしながら川をのぞき込んで、思わず歓声を上げた。台の上に、たくさんのカメがいたのだ。このまちの友だちが増えたようで、胸が弾んだ。カメたちの動きは目まぐるしい。首を伸ばしてあたりを見回すと、すぐにちやぶんと水に入って泳ぎだす。ひなたぼっこをしている1匹が、別のカメの甲羅の上によじ登りはじめた。よじ登られたほうはちっとも気にしていないようすだ。重くないのかな、とくすつと笑ってしまう。

5日後には、台の上でじつと雨に打たれているカメがいた。どつしりとして、岩のように動かない。甲羅が雨に濡れ、つやつやと光つ

ている。水中からすうーつと浮かんできたカメが、私のすぐそばの水面に顔を出した。こちらを見つめているようで、なんだか私が観察されている気分になる。私はいったいどんなふうに見えているのだろうか。近くで写真を撮らせてくれてありがとう、と小さな瞳を見つめ返した。

曇り空の日、台の上には1匹のすがたしか見当たらない。みんなどこにいたのだろうか、と暗い水中に目を凝らす。すると、小さいカメが大きいカメの後ろを追いかけるように泳いでいるのが目に入った。親子だろうか。2匹はだんだん水面へと上がってきて、壁ぎわに並んで顔を出した。壁に両手を添えているのがかわいらしい。今まで見たなかでいちばん仲良しなようすに、ほほえましくなった。

のびのびと生きるカメたちのすがたを眺めるたびに、慣れない環境で感じていた不安が和らいでいった。都留にすむ「先輩」として、自分のペースでいいんだよ、と教えてくれているだろう。今度はどんなすがたを見せてくれるだろうか。カメたちに会いに、また家中川沿いを歩いてみよう。

印南響（比較文化学科1年） 文・写真



日光浴をするカメたち。この場所を拠点に過ごしているようだ（2023年5月2日）



水面に顔を出した2匹のクサガメ。水から上がると、その体は黒っぽく見えた（2023年5月2日）

赤い架け橋



谷村町駅とポスト。谷村町駅以外にも、富士急行線の駅前にはポストが設置されている（2023年5月25日）

都留の住民になって一週間ほど経ったころ、私は友人に手紙を出した。彼は今、伝統芸能の修業をしている。その研修所の決まりで、携帯電話を持ち込めないそうだ。手紙を通したやりとりしかできないことにもどかしさを覚えて、ペンをとった。

私のアパートの近くにはいくつかのポストがあるが、いちばん気に入って利用しているのは、やむらまち谷村町駅前のものだ。最初に見たとき、実家の近所にあったポストに比べてずいぶんと年季が入っていたので驚いた。新しい建物が

伝わってくる。そんなどつしりとした雰囲気をもとっていた。

遠くからではカクカクした直方体に見えるが、近くで見ると角には若干の丸みがある。直方体の辺がきつちりとした直線になっているので、直方体に見えたのだろう。また、塗装はところどころ剥げてしまっているが、赤色はとても鮮やかだ。なでみると、剥げた塗料が粉っぽくなっていて、チョークを持ったときのようにうっすらと指ににじんだ。

さらに近寄ってよく見てみる。ポスト自体は古びているけれど、それを更新するように、上から「日本郵便」や「郵政創業150周年」といった新しいシールが貼られていた。年代が統一されていない見た目から、このポストが長いあいだ使い続けられていることが想像できる。

後日、いつごろから使われているのか調べてみた。すると、谷村町駅のポストは「郵便差出箱1号角型」という1970年から採用されている古い型だとわかった。設置された当時は「日本郵便」がまだなく、「郵政省」のポストとして利用されていた。肩書きは変わっても役割が変わることはなく、ながく本



谷村町駅前のポスト。「日本郵便」のシールや、郵便物の収集時刻を示す表などが貼られている（2023年6月4日）

学の学生や都留市民の声を預かり、都留の外とつないできたのだろう。

郵便は、私と友人をつなぐ唯一の架け橋だ。都留は細長い谷間で、山が住宅のすぐそばにある。大学とアパートの往復を繰り返していると、この街のなかだけで世界が完結しているような感覚になってしまう。そんなとき、年季の入ったポストに手紙を出しに行く。これまで学生や市民がそうしてきたように、私もこのポストを窓口にして大切な人と言葉を重ねていきたい。

北原日々希（地域社会学科1年） 文・写真

耳を澄ませる

都留に来て、驚いたことがある。それは、どこを歩いても水の音が聞こえることだ。山と田んぼに囲まれた私の地元には、川や用水路がたくさんある。とはいえ水はあまり流れていないので、川底が見えなくなるほど土が積み、植物が生い茂っていた。だから私は、聞きなれない水の音に心惹かれた。

田原の滝の先にある十日市場^{とおかいちば}方面へはじめて足をのぼす。知らない土地を一人で歩くのは少し心細い。こぶしを握りしめながら静かな住宅街に踏み入ると、道路と家のあいだに細い用水路が張りめぐらされていた。用水路のそばに近づいて耳の神経を集中させると、ぴちぴちと軽快な音に気が付く。まるで水が踊っているようだ。珍しいものに出会ったかのように、私の気分は踊りだす。

心のなかでスキップをしながら住宅街を抜ける。緑が増えてきたな、と思う間もなく行き止まりにぶつかった。だが、よく見れば錆びた門があり、まだ奥があるようだ。ドキドキしながら門をくぐると、大きくないのに、やけにはつきりと聞こえる水の音が飛び込んできた。自然に体内へ入りこむ優しい音をもっと味わいたくてゆっくり深呼吸すると、

身体から力が抜けていく。すぐそばに高速道路が通っているはずだが、グオオと重く響くトラックの音は遠く聞こえた。身体に満ちた穏やかな池の音が喧騒を忘れさせてくれた。

別の日に高尾通りを歩いてみる。閉店時間を過ぎたのだろうか、商店街のシャッターがほとんど下りている。車が通りすぎると、シャッターはガシャンガシャンと無機質な音をたてた。幼い頃からつねに感じていた生きている感じがなくて寂しさがひろがる。気配に気付いていないだけかもしれないと自分を励まし、歩みをとめて耳を立てると、ひかえめな水の音が聞こえてきた。少量の水が絶え間なく流れる音から、エネルギーが伝わってくる。なんだか「ひとりじゃないよ」と語りかけてくれているように感じた。

馴染みのない水の音を追うように都留を歩く。歩を進めるたびに音が変わっていくのがおもしろい。耳を澄ませ音に寄り添ってみると、水の音は私に元氣やゆとりを与えてくれた。新生活への不安もいつしか晴れている。水の音は人と呼応する力を持つということ、音を巡るちいさな旅が教えてくれた。

高橋美唯（地域社会学科 1 年） 文・写真



十日市場の住宅街に沿って走る用水路。水がわずかな段差を滑り落ちることで軽やかな音を奏でるようだ(2023 年 7 月 17 日)



十日市場にある湧水池。波紋の近くから水が湧いている。人気がないため、じっくりと音を味わえた (2023 年 6 月 11 日)

春陽を歩く



「うぐいすホール」に向かう本学テニスコート横の階段。木漏れ日のなかをワクワクしながら歩いた（2023年5月16日）

新生活が始まってせわしなく毎日を過ごしている、いつの間にか本学周辺を彩っていた桜の木は鮮やかな緑へすがたを変えていた。少しずつ色味の違う葉に魅せられ、携帯電話の写真フォルダは緑でいっぱいだった。まだ知らない植物を探して、本学の近くにある「うぐいすホール」周辺へ探索に向かった。

道端に咲く花の甘い香りに、足取りが軽くなる。歩きながら地元の長野市を思い出した。長野市も山との距離は近いが、山は自然のもの、街は人間のものという境界があるように思う。いつぶりで、都留は山あいにあるから

か自然と人間が一緒に暮らしている感覚に近い。鳥のさえずりで目が覚めることも、通学路で見たことのない植物に心を奪われることも、はじめての体験だった。

ハート型の可愛らしい葉に足を止める。傾きはじめて日の光を、葉が全身にまとっている。葉が落とす影と光とがまざりあい、葉の上に水面のような模様もできている。光に透かしてみると、葉脈や葉の形がくつきりと浮かび上がった。レントゲン写真みたいだ。細部まで観察すると、種ごとの葉の厚さや葉柄（※）の色の違いが明確になる。別々の地で生まれたタネが、風に運ばれてきたのだろうか。そんな想像までしてしまう。

さらに歩いていくと倒木を見つけた。コケに覆われた上に新しい植物が育っている。朽ちていく倒木と新しい芽、コケの深い緑と眩しいほどに明るい黄緑のコントラストに惹かれる。足元を見ると、枯れ葉の中から新芽がいくつも出ていた。こうして一つの植物の命が終わって新しい命が生まれるのだろう。

新緑に誘われ、これまでじっくりと目を向けることがなかった葉のつくりや、植物の生きいきとしたすがたに魅力を感じるように



ミツバカエデ。葉の縁が光の加減で白く光っているように見える。すうっと伸びる赤い茎も綺麗だ（2023年5月16日）

なった。気になった植物の写真を頼りに、植物を調べることも増えた。都留で暮らさなければ、こんなに心惹かれることもなかったかもしれない。そう考えると、毎日のちいさな発見が愛おしいものに思えてきた。

気づけば花の季節は過ぎ、木々は新緑から深緑へと色を深めている。水分を含んだ土と葉の青い匂いは、すぐそばで待つ夏からの便りのようだ。季節の移ろいとともに私も成長し、きつと次の春には今よりもつぶさに都留を観察できるだろう。そんな期待を胸に、今日も都留を歩く。

足元の小さな発見から



金山神社の石段に材料として使われている溶岩石。表面の小さな穴は、吸水性の良いスポンジのようだ（2023年6月22日）

4月下旬、雨が降っているなか、用水路に沿って都留のまちを散歩してみた。谷村町のほうへ歩いていくと金山神社^{かねやま}があった。足元に注意しながら境内への石段を登っていると、不思議な材質の石が使われていることに気づく。表面に小さな穴がたくさん空いていて、泡が弾けたような見た目だ。地元の福島では見たことがなかった。ふと、高校の地学の授業でふれた溶岩石と特徴が似ていることを思い出す。この石も溶岩石かもしれない。都留と富士山のつながりを感じ、観察してみることにした。

都留文科大学前駅のとりの十日市場駅^{とおかいちば}あたりには急な坂がある。その坂が溶岩石の流れた跡だと聞いて、さっそく観察に出かけた。十日市場駅に着くとすぐに下り坂がある。ここが、かつて溶岩石が流れた場所なのだろうか。溶岩石をたくさん見つけるぞ、と宝探しをするような気分で探しはじめた。神社やお寺だけでなく、民家の石垣や敷石などいたる所で発見した。

道ばたに転がっている溶岩石をひとつ手に取ってみる。表面の小さな穴には、コケが生えていたり、さなぎのようなものがついていたり、クモの巣が張っていた。ふつうの石とは違い、溶岩石の表面には多くの生きものが住んでいる。まるで自然の宝宝箱だ。

河原で石集めをしていた幼い頃を思い出して、後日、大学から歩いて15分ほどの菅野川^{すがのがわ}沿いを歩いてみることにした。川の水の透明度の高さに驚きながら、赤茶色や白っぽいコロコロとした石たちを観察する。すぐに黒くて角ばった溶岩石を発見した。まわりを見渡すと、さまざまな形の溶岩石が転がっている。丸みを帯びた溶岩石もはじめて見つけることができて嬉しい。気づかないうちに溶岩石を



菅野川の河原で丸みを帯びた溶岩石を見つけた。宝物を発見したようで嬉しかった（2023年5月17日）

探すスピードが速くなっていた。ひとり河原へ行くことは不安だったが、何気ない発見に心が躍り、夢中で溶岩石を探す。

観察を重ねていくなかで見つけた石たちは、私たちの身近に、小さな発見がたくさんあることを教えてくれた。また、普段は家にもりがちな私に、観察を通して都留のまちを歩きつけかけを作ってくれた。視点を変えてまわりをていねいに見渡してみると、まだまだ知らない気づきがあるはずだ。都留にある新しい発見たちとの出会いが待ち遠しい。

根本菜桜（比較文化学科1年） 文・写真

静寂を知る

都留に引越してきたばかりの3月末に、本学から東へ歩いて20分ほどの金山神社を訪れた。そのときは、山の急斜面と神社の階段の多さに怯え、境内まで入らずに帰ってしまった。それから1か月が経ち、今度こそは境内を見に行こうと張り切って家を出た。

鳥居をくぐり階段を上りきると、社がひっそりと建っていた。長い年月を経て、木材の茶色が深みを増している。空気が澄んでいてここだけ違う空間のようだ。曇っているせいか肌寒く、すうっと鳥肌が立つ。薄暗くて怖い。そんなとき、社の裏にネコのエサを見つけた。人の気配がなく、しんとしていて不安だったため、ネコがいることを知って少しほっとした。

翌日、ふたたび金山神社に足を運んだ。階段を上り、境内へ入る。目の前の社は昨日と変わらないはずなのに、木々の隙間から日がこぼれていて同じものには見えなかった。風で木がゆれると日の光もゆれて綺麗なおだやかだ。空気の流れが止まっているかのように静かで、鳥の鳴き声や風の吹く音、遠くから車のエンジン音などが聞こえる。神社だけが世界から切り離されたようだ。これを静寂と

いうのだろうか。地元の沖縄は、旅客機や戦闘機が上空を飛行していて、いつも音があつた。日常生活のなかで静けさに触れることはほとんどない。国語の授業で「静寂」という言葉は習ったものの、じつさいに感じたことはなかった。

今度は夜に訪れてみた。木々が黒々とそびえたち、神社を囲っている。明るいときには気づかなかった。階段は明かりがなく、真夜中の学校の廊下のようなようだ。肝試しに来ているような気持ちになる。静かなあまり、自分の息づかいだけが聞こえた。別世界に来てしまったようで不安になる。階段を上りうしろを振り返ると、車の走る音や電車が通過して線路がぎしむ音が聞こえた。

境内に入るとふだん生活しているときには気にも留めない音がよく聞こえてくる。静寂が、私の日常にひそむ音に気づかせてくれた。「目の前に見えることだけがすべてではない」という言葉を聞いたことがあつたが、その意味が少しわかったような気がする。同じ景色でも、音に耳を澄ませると違った景色に見えることを金山神社の静寂が教えてくれた。

野坂梨衣（地域社会学科1年） 文・写真



鳥居をくぐった先には明かりがない。真っ暗ななか、境内へとつながる73段の階段を登る（2023年5月22日）



晴れた日の神社の境内のようす。神社の裏にはネコのエサがあつた（2023年5月17日）

都留note

鹿児島からやってきて約3週間が経ったある日、都留の自然を感じたくなり自転車に飛び乗った。暑くなるかもしれないと、思い切って選んだハーフパンツは春風を楽しむのにぴったりの。ひとまず、自宅から自転車です10分ほどの谷村町へ走ってみよう。

用水路沿いを走り始めると、澄んだ水が目に飛びこんでくる。自然豊かな鹿児島から来た私でも驚くほど水が透明だ。幅が30センチほどだった地元の用水路より、都留の用水路は幅や深さ、水量がある。砂や草がたまっている、雨のあとくらいしか水が流れなかった故郷と大違いだ。何より、ころころと聞こえる水の音が心地よい。どこまでもついて行きたくなるようなワクワクする音だ。

しばらく走ると、田んぼの風景が広がる。私を取り囲む山々から、じわりと生命力を感じた。ふいに、ちゃぶちゃぶという音と子どもたちの楽しそうな声が聞こえてくる。どうやら、田んぼのわきにある用水路で水遊びをしているようだ。会釈をしながら通り過ぎる。幸せをわけてもらったようでペダルが軽い。

本学方面へ戻り、三ノ側公園のベンチで昼食をとることにした。腰を下ろすと、自然と

水の音に耳を傾けていた。ゴーゴーと水がコンクリートにぶつかる音がする。用水路を見ていると水面に落ちた花びらが、ずんつと沈みこんであつという間に流されていく。水の力強さを感じた。

都留で聞こえる水の音をもっと聞きたくなり、日を置いて十日市場へ足を向けた。車通りが多く、歩を進めるにつれて水の音が聞こえづらくなっていく。足元の用水路をのぞくと、鉄格子の隙間から見える水はしつとりと光っていた。車の通りが途切れると、とうろろろと用水路をなでるような音がする。さらに、用水路のなかは流水音の反響で満ちている。この音は車通りが多いと聞き逃してしまいそうだ。思わず、その繊細な空間に浸ってしまった。

都留を流れる水の音は聞いていて飽きることはない。歩くのが楽しみになるような、まじの音と私の気持ちを忘れたくなくて、新しいノートを開く。名前をつけるなら、英単語「note」の「音、楽譜」という意味とフィールド・ノートをかけて、「都留note」なんてどうだろう。4年間の思い出をこの「都留note」に書きこんでいきたい。

久永奈央（地域社会学科1年） 文・写真



本学近くの用水路。ころころ、と聞こえる水の音に耳をすませるのが通学中の楽しみになっている（2023年6月22日）



「道の駅つる」近くの用水路。子どもの声と水がはねる音が響いていた（2023年4月29日）

踏切の先に



下谷で見つけた踏切。横断するには自分で遮断機を上げなければならぬ（2023年7月17日）

都留での新しい生活が始まってしばらく経った4月下旬に、赤坂駅の近くの下谷^{しもや}で遮断機が下りたままの踏切を見つけた。強い日差しの中、ひっそりと立っている踏切は、鉄道好きな私を呼んでいるようだった。

昼とは違う踏切のようすを見たいと思い、20時過ぎに電車で都留文科大前駅から2駅先の都留市駅へ向かう。そして、駅前の道を大月方面に歩いた。昼間は半袖でも暑かったが、夜は長袖のパーカーを着ても寒い。踏切に近づくと、まわりの田んぼではグワ、グワとカエルの鳴き声が響き渡っていた。こ

の鳴き声は、地元の名古屋では聞いたことがない。幼いころに歌ったカエルの歌の「ケロケロ」というかわいらしい歌詞とは印象が違い、低く響く鳴き声だ。余韻に浸っていると、遠くから踏切の警報音が聞こえてくる。列車が踏切を通過するあいだ、踏切のそばにある紫色の花が風に吹かれていた。ガタン、ガタンという振動を足元から感じる。列車最後尾のテールランプが暗闇に消えるとカエルの歌声がまた聞こえはじめた。

21時を過ぎて列車の本数が少なくなったので、踏切のまわりを散策してみることにした。

舗装された道まで出ると、握りこぶしくらいの大きさのカエルに出会う。カエルはみんな親指の爪くらいの大きさだと思っていたが、はるかに上回っていた。カエルとは無縁の生活を送ってきたため、種類が分からない。調べてみると、背中のはっきりとした線が特徴のトノサマガエルだと分かった。このカエルは準絶滅危惧種に指定されている。貴重なトノサマガエルを見つけれられた経験を地元の友だちに伝えたいと思った。

トノサマガエルの大きさと珍しさに惹かれ、5月下旬にふたたび同じ場所へ向かった



側溝のなかで偶然見つけたトノサマガエル。見つけることができたのはこの日だけだった（2023年5月16日）

が、見つけることができなかった。けれども、グイ、グイと鳴くアマガエルに出会う。小さなからだでありながら大きな声で鳴くすがたは頼もしく見えた。これからの大学生活の不安を和らげてくれた気がする。

7月中旬、久しぶりに観察へ向かう。すると、時の流れを感じることができた。踏切そばにあった紫色の花は枯れていて、カエルのすがたも見られなかった。なにげない日常は、毎日少しずつ変化して次の季節へと向かっている。変わりゆく日々のなかで次はどんな都留らしさを発見できるだろう。

府内宏樹（地域社会学科1年） 文・写真

私を動かすもの



本学 1 号館にあるツバメの巣。アパートのように一つひとつが隣り合っている (2023 年 5 月 16 日)

4 月下旬、登校中にツバメが飛んでいるのを見かけた。地元の京都でも、中学校の通学路沿いの民家にツバメの巣があつたことを思い出す。当時はヒナたちが大きくなっていくようすや、親鳥がエサやりをしているようすを見るのが楽しみだった。今回はただ見るだけでなく、成長を記録したいと思い観察することにした。

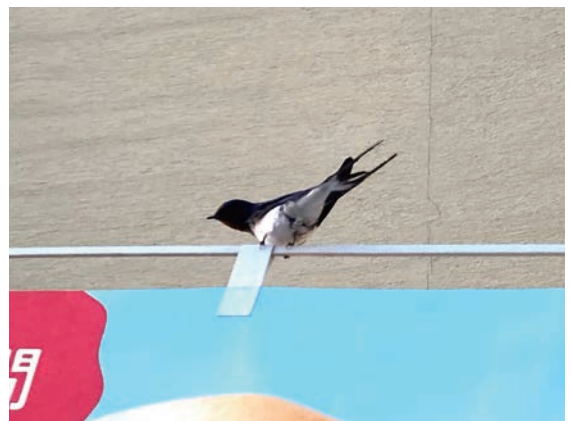
5 月 3 日の午後、強い日差しを避けるためぼうしをかぶつて家を出る。数分歩いたところにある住宅街で、2 羽のツバメが飛びまわっていた。かれらを真下から見ると、あることに気がつく。真っ黒だと思っていた羽の色が濃

い紺色だったのだ。ツバメは見慣れていたつもりだったが、じっくり向き合うことで新しい発見がうまれたことに驚いた。

本学に向かい、1 号館に作られているツバメの巣を見る。しかし、どれもボロボロに崩れていて現在では使われていないようだ。家を出てからまだ 1 時間も経っていないが、くたびれてきた。それでも巣を見つけないという気持ちに背中を押され散策を続ける。

本学の前から西へ進むと、5 分も歩かないうちにモスバーガーについた。壁におわん型のきれいな巣を見つけ、思わずガツポーズをする。巣の持ち主はどこだろうとあたりを見渡すと、向かいの電線に 2 羽のツバメがとまっていた。チュビチュビ、クルルとかわいらしい声を聞いて、疲れがあつという間に吹き飛んだ。

5 月 13 日、小雨の降るなか、京都からやってきた母と観察に向かう。巣では 1 羽がじつと伏せていた。パートナーはお出かけしているようだ。他のツバメたちは、風を切るような速さで地面スレスレを飛んだり、ぶつかる寸前で壁をよけたりしている。サーカスのアクロバットのようなツバメの飛びかたに目を奪われた。「そんなに飛びまわって何になるんやろなあ」と



モスバーガーの旗にとまるツバメ。至近距離で撮影することができた貴重な瞬間だった (2023 年 5 月 17 日)

母がつぶやく。その後調べてみると、雨の日はエサとなる虫が低い位置を飛んでいて、それを追ってツバメも低く飛び回ることが分かった。楽しいに飛んでいるように見えたが、かれらにとつては生きるための行動だったのだ。

「ツバメがどうしているのか見に行きたい」という思いは私を観察へと連れ出してくれた。そのたびに新しい発見があつたり、ワクワクしたりして、ますますかれらへの興味が湧いた。夏の終わりに飛び立ってしまうまで、まだ知らないツバメの一面や新しい驚きに出会いたい。

横山幸乃 (国文学科 1 年) 文・写真

センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、赤外線を感知すると自動でシャッターを切るセンサーカメラを使用して動物の調査をしています。今号では、はじめてうぐいすホールのうら山にカメラを2台設置しました。5月から7月に撮影された動物を紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



ニホンジカ

メスです。^か鹿の子模様と呼ばれる白い斑点が見られます（2023年5月29日）



イノシシ

久しぶりに記録されました。アブラチャンの森を横切ったようです（2023年6月19日）



ニホンジカ

春から夏にかけて、体毛が夏毛になります（2023年6月21日）



テン

木登りが得意です。冬毛から夏毛に生えかわっているようです（2023年7月5日）



タヌキ

二匹がアブラチャンの森を歩いているようすが記録されました（2023年7月10日）



ニホンジカの食跡

アブラチャンの木の皮を剥いだ食跡です。森で多く見られました（2023年6月23日）

ムササビ観察日記

本学ではキャンパスのうら山で、都留のシンボルであるムササビの観察を行っています。2008年に巣箱を、2013年にライブカメラを取り付けました。本学ホームページでもその映像をご覧になれます。2022年12月4日以降、巣箱に帰ってきていなかったムササビですが、およそ5か月ぶりにすがたを見ることができました。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

5月1日



ようやくムササビが帰ってきました。お母さんが子どもを包みこむようにして眠っています。

5月9日



巣箱の壁をよじ登ろうとしています。クリクリとした目がかわいいです。

5月17日



お母さんが子どもをおなかに乗せたまま、気持ちよさそうに仰向けになって寝ています。

5月22日



巣箱のなかは空っぽです。子育て期間が終わり、無事巣立ったのでしょうか。



ムササビを見守っていると

ムササビの子どもは毎日元気に動き回っていて、その相手をするお母さんは大変そうです。今回は、5月12日のムササビの親子のじゃれ合いのようすを紹介します。



子どもが、お母さんの体の上のにしかかりました。お母さんもやり返します。飽きずにずっと繰り返していました。



子どもとのじゃれ合いに疲れたのか、お母さんが上のほうへ逃げてしまいました。子どもも、お母さんのうしろを追いかけます。



子どもがお母さんの尻尾を引っ張りはじめました。いつまで経っても降りてこないお母さんに構ってもらおうと必死です。



尻尾を引っ張ってもお母さんは降りてきてくれませんでした。今度はお母さんの近くの壁によじ登ります。



足を滑らせたのか、子どもが勢いよく転げ落ちてしまいました。落下する一瞬で毛玉のように丸まったので怪我はなさそうです。



しばらく経ってからもう一度のぞくと、親子で気持ちよさそうに寝ていました。きっとたくさん遊んで疲れたのでしょう。



禾生橋より撮影（2023 年 5 月 6 日）

都留の風景写真集

—新緑の候—

今年も都留に新緑の季節がやってきました。初夏の日差しを浴びた植物たちは、競うように空を目指します。見るたびにすがたを変えていく木々と、緑の濃淡が楽しめる山々の景色は都留の魅力です。今号は富士急行線沿線を歩いてみつけた新緑の風景を紹介します。

村井開（地域社会学科 2 年）＝文・写真



十日市場 (2023 年 5 月 24 日)



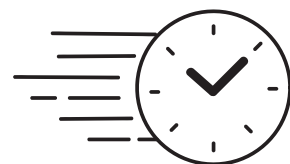
夏狩 (2023 年 5 月 5 日)



夏狩 (2023 年 4 月 16 日)

FIELD NOTE

no. 114 Jul.



編集後記

時の流れを感じる瞬間

発行人
北垣憲仁
統括編集者
西教生
編集長
原口桜子 (6-7,12-15,22-23)
村井開 (8-11,32-33,48-49)
編集
浅井祐音 (2-5,16-19)
西佐和子 (46-47,50)
原優希 (20-21,24-27,45)
渡邊結佳 (1,28-31,51-52)
印南響 (34-44)
北原日々希 (34-44)
高橋美唯 (34-44)
谷上碧 (34-44)
根本菜桜 (34-44)
野坂梨衣 (34-44)
久永奈央 (34-44)
府内宏樹 (34-44)
横山幸乃 (34-44)
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 114号

発行日: 2023年7月26日

発行部数: 3500部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail:

fieldnote.2020@gmail.com

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにあります。気軽にいらしてください。

なつの風物詩がお店に並び始めたときです。5月初旬、スーパーへ買い物に行くと、早くも花火が売られているのを発見しました。毎年、花火のパッケージの派手なデザインをみると、もうすぐ夏が来るのかとワクワクします。最近ではいろんな形や色の花火が登場し、技術の進歩を感じます。けれども私は、時間を忘れてやさしい灯りをただぼーっとみつめることができる線香花火が大好きです。小さいころ、弟と一緒にどちらが線香花火を長く燃やし続けることができるか競い合ったのが懐かしいなあ。今年の夏は編集部員のみんなと線香花火で対決をしたいと思います。(原優希)

がらがらでいつも座ることができた富士急行線も、いまでは山手線顔負けの満員です。私たちの生活に変化をもたらしたコロナも少しずつ終わりが近づいてきたのでしょうか。アルバイト先のホテルにも、ふたたび世界中からお客さんがやってくるようになりました。ドイツ、ベトナム、カナダ、アルゼンチン……。ホテルのなかは、まるで小さな地球。にぎやかになったホテルのようすに時の流れを感じます。お客さんの楽しそうすがたを見るのが、何よりのバイト代です。僕も夏休みは海外に行こう。メコン川のジャングルクルーズに参加したいな。(村井開)

れんこん畑を横目に地元の道を自転車で走っていると、何枚もの田んぼが広がっています。空の高いところを飛んでいるノスリはのびのびとして気持ち良さそう。いつもの景色が後ろへ流れて行きます。中学生のときから乗っている自転車は相棒といっても良いくらい。「中学生に戻った気分だなあ」。自転車を漕ぎながら鼻歌まじりで坂を下っていく。「あれ、中学生だったのって何年前だっけ? え、5年前!」と急にびっくりしてばかんとする。そんなに前のことだっけ。見える景色は変わらなくても、時間は流れているのだなと感じました。(渡邊結佳)



アカゲラ

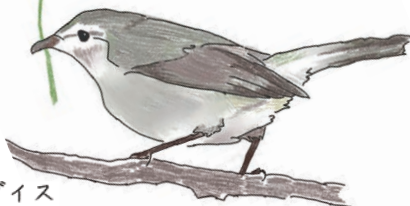


アオバスク

かたろうよ (仮)



ルリビタキ



ウグイス

2023 年 12 月発行予定



表紙写真

草木をかき分けて進むと、柄杓流川にたどり着きました。澄んだ水と鮮やかな緑が私たちを迎えてくれます。

古写真で見る都留の川

1964（昭和39）年に撮られた写真。人びとが桂川でアユ漁をしているようすを写している。柄杓流川を流れた水は桂川へ合流していく。自然は隔たることなくつながっていた。そして古写真は、今を記録する私たちと過去をつないでいる。



フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。

FIELDNOTE
no. 114

発行日 2023年 7月26日（年3回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部

都留文科大学
都留市田原3-8-1
山梨県
TEL 0556-32-1111
FAX 0556-32-1112
E-MAIL info@yuasa.ac.jp
www.yuasa.ac.jp

FIELDNOTE
2023年 114号
特集「柄杓流川」

地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門